

## 京都外科集談会抄録

昭和29年6月例会

## (1) 腹部停留睾丸に対する1手術例

足立和保

私は最近24才の男子で右側腹部停留睾丸を有する1例に対し有莖整復の手術に依らず精系精管共に過短にして種々操作をして見たが皮下鼠蹊輪部迄しか下らず之を有莖整復する事が不可能であり精管精系を結紮切断せしめ該睾丸を観察するに色調の変化を来す事なくその発育も良好なるため、ハンター氏導帯と残存せる周囲血管よりの多少共血液の循環あるものと考へ之を自家遊離の整復固定を行う事とし“ヘルニヤ”を合併していたので之の根治手術を併し該睾丸を陰嚢内に遊離の移植を試みた所、経過良好で発赤腫脹血腫壊死になる事もなく術後1ヶ月になるも睾丸感を有し未だ機能を有していると考えられる1例に対しその発見頻度手術方法適応及びヘルニヤの合併例、及び之よりの悪性化に就いての若干の考察を加へ一応病床が成功したかの如く考えられるが今後の長い観察により批判されるべきものを報告した。

## (2) 虫垂切除後に発生せる腸重積症に付て

細野幸吾

33才の主婦の虫垂切除後に発生した廻盲部重積症の1例について報告し其の発生機点及治療に付て考察を試みた。

## (3) 裂手及び裂足について

山田 栄

Kümmel が命名した裂手、裂足は先天性指趾畸形の中でも稀な疾患に属し、歴々遺伝的関係が証明され、同一個体では対称性に発現することが多いと云われているが、4才男子の両足の裂足、3才女子の右裂手、20才女子の両側裂手及び右裂足、15才男子の右裂手の4例の指趾の畸形の中でも比較的稀な疾患を経験したので報告した。

## (4) 脛骨結節裂離骨折の1例

山田 栄、玉重 亨

脛骨結節の裂離骨折は、多くは発育期にある青少年に発生し、成人に来ることは極めて稀とされているが、我々は野球で右脛関節を適度に屈曲して捕球しようとした際、ギクツという音と共に激痛を来し、歩行障害を来した。X線所見により右脛骨結節裂離骨折と診定し、之に手術的侵襲を加へ、骨折遊離骨片を摘出除去し、脛骨結節と脛骨々体部との間の癒着部をも切除し、膝関節伸展位でギプス固定を1ヶ月行つた後、理学的後療法により術後2ヶ月で膝関節の機能は正常に復し、疼痛も消失させた1例を報告した。

## (5) 遠位橈尺関節に於ける外傷性尺骨単独脱臼の1例

玉造整形外科病院

山本忠治、山田 栄

遠位橈尺関節の尺骨単独脱臼は橈骨々折により2次的に発生するものは尠くないが、純外傷に単独で来るものは極めて稀である。

Baum, Tillmanus, Hoffa 等少数の報告例に過ぎない。本症は恰も整復機序と全く逆コースをとつたと推察出来るものである。即ち綱で右手を強く牽引されながら瞬間的に、手背側より落ちた木材ではねられ、積荷の木材の間ではさまれ、橈尺骨間の離開及び過回旋運動が働いたと考えられる。又之に解剖学的考察を加へ発生機序を充分推察出来た興味ある1例である。

## (6) 最近経験せる外傷性硬脳膜外血腫の2例

高山文三、松田 晋

外傷性頭蓋内血腫の手術時期に就いては、外傷後1~2日は姑息の処置に止め、自然止血が充分行われた後手術的に血腫の除去をすべきものと考え、吾々が最近経験せる外傷性硬脳膜外血腫2例の内、症例Iはこの方針のもとに外傷後第6日目に安全且容易に手術を為し得た。之に対し症例IIは症例Iと同じく中硬脳膜動脈からの出血による硬脳膜外血腫例であるが、lucid interval 後の症状の進展が重篤且急速で、姑息的手段により止血を待つては到底死の転機を避けることは不可能なりと判断し、かかる場合には躊躇なく早期積極的に手術的に止血と血腫の除去を試みるべきものと考え、外傷4時間後に手術を行い救い得た。その際止血の手段として血腫側外頸動脈を結紮して相当の効果を認めた。

## (7) 巨大結腸症の1手術治験例

福島 浩三

出生直後より腹部膨満及び頑固なる便秘を訴え、姑息的治療により根治することなく、しかし辛うじて大禍もなく経過せる26才男子の巨大結腸症に対して、拡張肥厚せる下行結腸S字状結腸の全切除術を施行、術後、生理的にも良好なる結果を得たと思われ一応例につき、その発生に関する文献的考察並びに手術経過にもとづき、本手術の可能性、根治性につき些かの検討を加えてみた。

## (8) 特発性総輸胆管拡張症の1例

土屋 涼一

## (9) 手術創に対するデボカインの鎮痛効果

井戸 信一

手術創の術後の疼痛を防ぐ目的に、プロカイン、ブチルアミノ安息香酸を有機溶媒に溶解せる持続的効果を有する局所麻痺剤デボカインを手術創に直接注射する方法を試みた。主として肛門疾患に対して使用し、6例に乳腺剔除時局所に、計39例に注射したが効果著しきもの25例、効あるもの9例、効なきもの5例であった。

効果の判定には術後鎮痛剤の注射不要であり、縫布交換時に疼痛を訴えないものを取った。

また5~10日間注射部位の知覚鈍麻を認めた。尙同期間の患者でデボカイン非使用例と比較するに使用例の方に鎮痛剤使用例数かはるかに少いので、デボカインを使用した例では確かに鎮痛効果の持続が認められる。両側乳腺同日剔除例に於て1側にデボカインを使用し、他側に使用せずに比較したが効果を確認できた。副作用として局所の腫脹することがある。赤時に無菌性膿瘍をつくる事が稀にある。

追加 痔手術に対する持続性麻酔剤デボカイン (油性水性) の応用

大場 一誠

追加に対する質問 野川

持続性麻酔による神経の上行性変性の報告があるが、その様な例はないか?

答 大場

経験していません。

追加に対する質問 増田

術前にデボカインを注射する方法は、薬液が創面から流出するのを防ぎ、均等に行き互らせるのにはよい手段だと思う。併し、肛門周囲膿瘍の如き場合には、デボカインを注射してマツサージする事は感染菌を健康部まで拡げる恐れがあるのではないかと思う。14例の肛門周囲膿瘍に使用された時、その点については如何でしたでしょうか。

答 大場

その場合、一応膿瘍部を避けて一般的麻酔法を行う、そして排膿及び膿瘍壁を切除した後、その部に特別に注射を行えばよい。

(10) 原発性肺臓癌のI手術例

高山日赤, 岡田 守

(11) 脊椎分離症に対する骨移植術の経験

新潟県立中央病院

森 益太, 林 瑞庭

我々は7例の脊椎分離症、及1例の脊椎迂り症を経験し、これ等に対し、分離部を新鮮化して骨移植を行い且自家脛骨を以て後方脊椎固定術を施行した。遠隔成績の略々判明せる5例に対し比較検討せる結果次の如き結論に達した。

1) 神経症状の軽度の例に対しては必しも骨成形的椎弓切除術に依らずとも我々の術式にて略々根治し得る。

2) 術前の腰痛症状の殆んど全部が手術を契機として消失する。

3) 短期間の安静及固定で速かに分離部の骨性癒合を来す点に於いて極めて満足すべき結果を得たことをここに報告する。

追加 桐田

分離部を新鮮化してその部に骨屑を充填し骨癒合には成功したが、仮骨形成により上部神経根を圧迫し、術後8ヶ月目に根性坐骨神経痛を再発し、ミエログラフィーで、これを認め得た1例を経験したので骨移植を行う際には慎重なるを要するものとする。

質問追加 山田助教授

大変優れた成績を挙げて居られるが術後固定療法継続期間は如何。

脊椎分離症はその原因が尙充分に解つて居らない、従つて之が適当なる療法と云うものも決定して居ないと云つてよい。結局現在の処「動かない関節は痛くない」と云うような観点から固定術が採用されて居るに過ぎない。色々な術式が採用されて居るが100%有効と云うようなものもないと思われる、将来多数例に就いて手術適応症を検討し、後療法等の問題に就いても充分吟味の必要があるように思われる。

答

大体約2ヶ月のギブス床、2ヶ月ギブス固定、爾後約2ヶ月装具コルセットを装着せしめます。

我々は罹患椎弓の動揺が脊椎分離症の腰痛の主なる原因と考え、これが固定及分離部の生理的復旧により、この症状をかなり消滅せしめ得ると考え、かゝる術式を採用している。現在の処手術例の良結果を得ている。

(12) 吾々の吸入麻酔方法

八牧力雄, 名鳥俊一

守安 久, 鈴木正貢

第1法: i) 前投薬 (イソミタル, ナルスコ) ii) 5% コカイン2c.c 経皮的気管内注入 iii) 導入: 2.5% ラボナール (就眠量×2) → オラールウエイ → マスク →  $\frac{N_2O (3000) + O_2 (1000)}{\text{半閉鎖}}$  → 徐々にエーテル追加 →  $\frac{N_2O (1500) + (O_2 500)}{\text{殆ど閉鎖}}$  → エーテル (閉鎖) → III期

II相で挿管 iv) 維持: エーテル。長所 i) 挿管がゆつくり出来る ii) 筋弛緩剤を要しない。短所 i) 挿管迄に時間がかかる (8例の最短22分, 最長44分) ii) 既に気道の狭窄あるもの (例えば甲状腺腫) は呼吸が止る。挿管せずマスクのまま維持してもよい (3例)。第2法: 導入はラボナールでアメリカゾール又はS.C.C.を併用し挿管, エーテル維持。S.C.C.は屢々呼吸停止を来すが直ぐに恢復する。導入より挿管迄 (8例の最短5分, 最長17分)。第3法: 挿管迄第2法と同様、維持は  $\frac{N_2O (4000) + O_2 (1000)}{\text{半閉鎖}}$  + 必要に応じてラボナール (3~5cc) アメリカゾール (3~6mg) 追加。長

所：術後瘰癧増加なく、電気メスを使用し得る。(7例)

(13) 剔出不能の悪性腫瘍2例に対する  
Nitromin の使用効果

大川 弘

第1例 10才、女子 Hypernephroma corticale

第2例 6才、男子 Retikulosarkomatosis

上記2例の悪性腫瘍に対して Nitromin を使用した結果1時的に可成著しい効果を認めた。

近時腫瘍に対する化学療法が発達して来た。而も動物実験の結果は必ずしも臨床の結果と一致しない。というのは動物実験の対象となる腫瘍は凡て可移植性のものを使用しているからで而もこれは凡て Impedin 陽性のものである。ところが人間の癌は凡て Impedin 陰性である。たゞ人間の肉腫は凡て Impedin 陽性。亦 Hypernephrom も陽性である。鳥瀉教授によれば Impedin 陽性ということはそこに何等かの Mikroorganism が関与していることを意味する。この意味で人間の肉腫系統のものに Nitromin が何等かの効果を示すことは意味あることと想う。

(14) 尿道瘻性鎖肛の1治療例

足立道五郎

30才の男子の尿道瘻性鎖肛(既に3才時人工肛門が造設されている)の症例に対し会陰部術式によつて瘻管の切断閉鎖及び同時に肛門成形術を行い成功した。診断上最も重要なことは直腸尿道瘻の位置及形態を知ることであるが、尿路及直腸のレ線学的検査は勿論不可缺であるが必ずしも明確な所見を得るとは限らず膀胱高位切開及開復術等によつて確実に診断をなし、同時に治療の1段階とすることが往々必要である。治療上では先ず尿路上行感染に対する予防が常に必要である。手術の第1段階は肛門部切開或いは人工肛門造設等を出生後可及的速かに行つて排便を計る事で、第2段階は患者が生長して充分手術に堪え得る時期に到つて直腸尿道瘻を閉鎖し且肛門成形を完成せしめるのである。尙直腸尿道瘻の閉鎖及肛門成形の術式に対し若干の考察を行つた。

(15) 足部骨関節結核に対する病巣廓清術の  
検討

近藤鋭矢、赤星義彦

骨関節結核のストレプトマイシン(以下SMと略す)療法

David M. Bosworth et al.

J. Bone & Joint Surg. 34-A. No.2. 1952

著者は標題に関し次の4問題を提出している。

1. SMだけで(外科処置なく)閉鎖性病巣を制圧、乃至、治癒させ得るか?
2. SM投与時、膿瘍を切開すべきか、切開後は閉鎖すべきか、開放したまゝにすべきか?
3. 瘻孔が存在する時、SMと外科的処置を行えば、閉鎖の結果の永続性はどうかであろうか?
4. SMの長期間投与は、不利な結果(SM副作用、菌のSM抵抗性獲得)を生じないだろうか?

臨床成績からみると、SMだけでは病巣を治癒せしめ得ず、外科手術を必要とするが、SM使用により甚だ安全率率となつた。SMによる不利な結果は大した物ではなく、SMを使用しない時の損害を考えれば耐え難いものではない。

(近藤 茂 抄訳)

Perforated Peptic Ulcer

穿孔性消化性潰瘍

Schmitz, E. J. : Ann. Surg. 138, 1953

1948年~1952年の5年間にKing Country Hospitalに於て取扱つた136例の穿孔性胃・十二指腸潰瘍について、主要症状、所見、診断、治療の効果等の点から考察して、以前のこの種の統計と比較検討した。

特に変つた症状 所見はないが腹痛を伴わない例がある事と胃穿孔の方が十二指腸穿孔より遙かに重篤な症状を呈する事がわかつた。

保守的療法もその適応の場合には決して捨て去るべき方法ではないが、吾々はかんばしい成績を挙げる事が出来なかつた。

穿孔部を単純閉鎖法により閉ぢるか、場合によつては一次的に胃の亜全切除を行うのが一番良い方法である。初めて単純閉鎖法や保存療法で処置した患者では、症状の継続がある事が多いから8週間以内に二次的の胃亜全切除と行う事に依つて、良い成績を挙げる事が出来る。

(牧 安 孝 抄訳)